

オリジナリティを求めて

—— 言語化による自己認識の明確化

新井久容

1. 問題関心
2. 仮説
3. 方法
4. 分析
5. 結論

1. 問題関心

『私を探してあと五センチ』（2001年春学期「総合5」レポート集）を初めて読んだ時の感動は忘れられない。日本語を学んでいる留学生たちは実にさまざまなことを考えている。そして、それを表現しようとしている。もちろん、文法的な誤りが残っている文章もある。しかし、それでもなお伝わってくるものがあつた。そこには、それぞれの「私」がいたからである。彼らのオリジナリティはどこから生まれたのか。それが、私の最初の問いであつた。

この授業の目的は、内言と外言の往還関係の活性化、すなわち言語能力の育成である。自分自身の考えていることをいかに形にしていくかが、一本の柱となっている。ここで私が注目したのは、他者とのインターアクションを重ねることによって、学習者が変わっていくことであつた。個々の変容過程が窺えるレポートほど、私にとってはおもしろいレポートに仕上がっている。これは、自分の中での対話（思考）をしつつ、他者との対話（表現）、つまり自分と同じ言語ルールを共有しない者との対話を

通して、自分の思考を深めることができた結果なのではないか。個人のオリジナリティにも、この他者とのインターアクションがかかわってくるのではないかと考えたのである。

「総合」の授業でいうオリジナリティとは何であるのか。テーマ、文体、構成、意見など項目が特定できるものなのか。相互評価表の指標によれば、「この人にしか書けないレポート（固有性）」であり、項目を特定しているというより、もっと総合的な判断をしているように思われるが、ここでのオリジナリティの概念自体はまだ曖昧である。オリジナリティはいったい何に基づいているのか。そして、そもそも、オリジナリティの獲得は検証できるのか。これらの問いをベースに以下の分析を進めていきたい。

2. 仮説

①思考活動＝言語化（＝内言化）

ひとはことばを他者から学ぶ。他者の表現（＝ことば）を受け取って、自分の中に引き入れ、自分のことばにしている。引き入れたことばによって、ひとは考えているのである。自分の何ものかわからない思いを、引き入れたことばを用いて粹付けしようとする作業が思考であり、言語化＝内言化とも呼ぶことができる。内言とは、この他者からことばを引き入れた結果として蓄積された言語的コードのことを言う。ひとが思考するということは、内言化を図り、同時にその内言を蓄積していくことでもある。ひとは生涯、いろいろな他者からの働きかけによって内言を刺激され続け、言語を獲得していくことになる。

②言語化＝自己認識の明確化

さて、このようなプロセスにおいて自己というものを考えても実体としては捉えられないだろうが、あえて言うのであれば、言語化＝内言化されたもの、すなわち、思考を、自己と見なすことが妥当であると思われる。言語化することによって何ものかわからなかった思いを形にする、つまり、漠然としていた思いが何であるのかをことばにする、この「ことばにする」時点で、私たちは自分を確認しているのである。これが、すなわち、自己である。このことは、今まで見えていなかった自分が見えるということであり、今まで認識していた自己の上にまた新たな認識が加わることである、

と言い換えることが可能だろう。

③自己認識の明確化＝オリジナリティの獲得

このように考えると、言語化とは、自分の思考が蓄積されていくことであると同時に、新たに自己を認識していくことでもある。そして、このように新たに自己を認識できたかどうかは、「自分のことば」（＝オリジナリティ）を獲得できたかどうかによって確認される。逆に言うと、オリジナルな「自分のことば」で表現するためには、自己認識の明確化が不可欠なのである。

以上から、「オリジナリティの獲得には自己認識の明確化のプロセスが不可欠である」という仮説を立てることができるのではないだろうか。言い換えると、他者とのインターアクションによる言語化の過程が個人のオリジナリティの獲得過程でもある。

3. 方法

上記の仮説を検証するために、「総合」授業（2001年春学期）を通して提出されたレポートと授業記録に基づき、時間軸にそって個人の変容を追う。

具体的には、学習者が最初に書いたレポートを出発点とし（[I]）、それが、他者とのインターアクションを通じて、どのように理解可能な表現としての形を成していくのかについて（[II]）、「動機・仮説」をめぐるクラス内議論（ α ）とインタビュー（ β ）の二段階に分けて検討していきたい。

今回は、学習者に対して下記のような分類を試みた。それぞれに該当すると考えられる三名をピックアップして、分析を進めることにする。

①既にある程度、自分の思いが自分の中で言語化（思考）されており、さらに、他者とのインターアクションによってそれが明確化（確認もしくは修正も含む）されていく例。

：学習者 A

②自分の思いが自分の中で明確に言語化（思考）されていないが、他者とのインターアクションによってそれが明確化されていく例。

：学習者 B（特に「仮説」設定過程において）

学習者 C（特にインタビュー後結論に至るまで）

4. 分析

(1) 『学習者登りと私』

[I] 最初のレポート（4/20）：「旅行と私」

私は旅行が大好きだ。いつからかよく分からないかバックをかついで旅立つが楽しみになった。…（中略）…

旅行が好きだったのは、まず、日常生活を離れて自然と一体になる。それで、知らない人に会って話すことができる。最後に旅行が終わって帰る時自分をもっと大人になったような気がした。旅行代は自分がアルバイトをしてみたためのお金で旅行を行ったら、もっと価値があると思う。

図書館で一生懸命勉強することも重要だが、本で学ぶことができない社会勉強を旅行をとおして一つ一つ身につけてのが好きだ。ですから、私は機会があれば旅行を立ててしまう。

A は「私も今旅行とスポーツに関心があります」と自己紹介（4/13）した通り、簡潔な文章で「旅行が好きな私」を語り始める。しかし、「大好きだ」という思いとその理由はある程度示されているものの、「なぜか」の部分はまだ曖昧であり、ある意味では「私」という「個」が感じられない記述にとどまっている。この彼の表現は、授業におけるインターアクションを通して具体性を増し、「自分のことば」となっていく。

[II] 他者とのインターアクションによる表現の明確化

α. 「動機・仮説」をめぐるクラス内議論より

まず、4/27に次のような議論が交わされる：

A：旅行は人生だと思います。学校で学ぶことができないこともあると思うんで。

H：今まで旅行して、社会勉強した、少し大人になったというエピソードはありますか？

A：…その（スリラー山）頂上で会った年配の人があるんです。それ、その人は会社員で、会社を辞めて、旅行する人だったんですよ。…お金より自分がしたいことをすることが自分の気にしたんですよ。

H：…僕の質問はちょっと大人になると思った瞬間。

A: はい, そうですね。

H: …それで, ちょっと大人になったと思うのは何故?

A: …自分のことは自分でしなければならないから, 男っぽいじゃなくて, 難しいですね。

H: そのだから, その具体的なエピソードを書きましょう。

A: はい, わかりました。

H: その素晴らしい人に会ったエピソードでもいいし, 自分がひとりで何かできなかったエピソードでもいいし, それをもうちょっと具体的に。

上記では, 「大人になったという具体的なエピソードは」という再三の問いかけ(太字部分)に対して, A は明確な答えを返せない。「お金より自分のしたいことをすること」を評価する発言や, このやりとりの直前に A が口にした「自分のことは自分でしなければならない」という表現を再度用いたりしているが, 担当者が要求している具体性にはほど遠い。「大人になる」ということが自分にとって何を意味するのかについて, 捉え直しができていない様子が伺える。

しかし, 第二レポート(5/9)には, この「具体的に」というアドバイスが反映された表現が付け加えられる。「自分がひとりで(何か)できなかった」ことができるようになり「大人になった気がした」と, 自分の体験を通して表現されている。その部分を見てみよう:

…3つ目は, 旅行が終わって帰る時, 自分をもっと大人になったような気がする。一応, 旅行に行くと, すべてを自分がしなければならない。簡単な食事から, テントの設置, 旅行の計画など自分がしてみながらよくできたこともあるし, よくできなかったこともある。できなかったことは何度も繰り返してみるうちに身につくものである。例えば山へ行った時道に迷ったら, どうすればいいか分からない。隣に誰かがいたら, 一緒に話し合っって問題を解決するが, もし一人だったら怖くて何でもできなくなる。この時落ち着いて自分の力で地図を見, 羅針儀を見, 山を出てきたらその気持ちは言葉で表現できないだろう。この時こそ僕は自ら大人になったような気がした。

さらに, 5/11の議論において, 「素晴らしい人に会った」ことについての「具体的なエピソードを」というアドバイスが再びなされる:

H: (人生の話が好きだという A に) 具体的に, エピソードはあるんですか。

A： …私が知らないことを話した人がたくさんいました。

H： 今まで一番、いろんな人の話を聞いたけれども、一番印象に残っている、一番よかったエピソードを一つ入れたら、とてもよくなると思いますね。

これについて、A は第三レポート（5/24）に次のような形で反映させていく。今まで会った人の中で「一番印象的な人」について語り始める：

…今まで旅行をしながら会った人々の中で一番印象的な人が一人いる。50代の男性、会社員である。韓国で「百頭大幹」という言葉がある。これは知利山から百頭山まで山を歩いて行くことである。専門登山者が行ったら、普通26日ぐらいかかる。食べ物や服やテントなどをバックに入れてずっと歩きばかりである。そのバックの高さは自分の背ぐらいだ。僕が会った所は知利山である。この方はもう5度挑戦したことがあるが、せんぶ失敗したそうだ。でも、百頭大幹を成功ために、放棄しなくてできるまでチャレンジするそうだ。自分がしたい事を決めたら、できるまで努力する姿がよかったと思う。その方会った後、僕の考え方が変えて来た。

A はテーマに関して既にある程度、自分の中での言語化（思考）をしていた。これは、最初のレポートで提示されたAの対象への関心の記述に表れていると思われる。しかし、これを発展させていくためには、授業における他者とのインターアクションが必要であった。授業内では、自分の体験と重ね合わせて具体的に語る事が繰り返され要求される場面が何箇所か見られる。Aはこの要求を受け入れ、さらに対象を自分に引き寄せて考えていく。つまり、Aはそのような形での思考を重ねた結果、対象を自分の問題として捉えることに成功し、それを着実に「自分のことば」として表現していくのである。

β. インタビューより

上記に示したAの思考と表現がさらに広がりを見せるのは、山登りを趣味にしている女性がAの仮説に共感しつつも彼女自身の考え方を披露した後である。Aは「私にとって山登りは『人生の姿』だ」という自分の仮説を補強するアイデアを得ることになる。以下は、そのインタビュー内容を報告したレポート（6/15）からの抜粋である：

彼女は私の仮説に同感し、すなわち、僕の仮説「人生の姿」について話し続けた。彼女が考えている山の頂上は自分が願うことが実現になった時だと言った。いわゆる成功だ。山によって高い山もあるし、低い山もあるように人によって願うことも別々だ。この頂上はいくつあるか自分も知らず、誰も知らない。…（中略）…私も今考えている頂上がある。この頂上に着いたら、次はもっと高く難しい山に向けて走っていこう。

ここからAは次のように考える：

山（自然）と人間はお互いに言葉でコミュニケーションができないのに山から沢山のことを習っている。必ず言葉でなく体験で人生を習える。人生を習う時一般的な本より実際の体験がいいのではないか。もちろん「大人になる過程」という本もあるが、本を読んで知っていることと、実際に苦勞しながら習ったことと果たして同じかな。。。表面的の大人ではなく、内面的の大人になることを山から習う。

山登りを人生の姿に重ね合わせて捉えることは、何もAにしかできないことではないだろう。しかし、Aはクラス内での議論に刺激を受けながら「なぜ山に登るのか」を自分の体験に即して考え続けた。今までの山登りを振り返り、そこにどのような意味があるのかを突き詰めた結果、「『体験』を通して『内面的な大人』になる」ことを導き出したのである。これには、「ひとりでできなかったことでも何度も繰り返してみるうちに身につく」（第二レポートより抜粋）というAの体験が生きている。Aという「個」を通じたことばは、A自身のオリジナルなものである。Aが結論へと向かっていく中で、タイトルを一般的な「旅行」ではなく「山登り」として対象を絞っていったことにも、Aの言いたいことが明確になった過程が示されているだろう。上記の結論部分を導き出すことができたAは、今まで気づかなかった自分にも気づくことになった。これはAの自己認識の明確化と言えるのではないだろうか。

(2) 学習者B『志賀直哉と私』

[I] 最初のレポート（4/16）：「志賀直哉と私」

私はソウルで生まれ、幼い頃から、ずっと車が通っている都市で育てられたから、いつも田舎に憧れてきた。田舎の木とか川など。そのせいか、家にはいつも草花が多く、庭には犬があそんでいるのである。

大人になり、それに対する憧れによって生物学を専門するようになった。しかし、学問

における生物学は私の考え方とは少し違っただけ、すぐに興味を失ってしまったのである。

これから何をしようかなと将来が心配になり、さまよっているとき、日本文学作家の中で志賀直哉という作家の作品に接するようになった。**彼の作品は自然描写が面白く**、自然と調和を成しながら葛藤を極めてきたという内容をあらわしていたのである。この頃のように科学の発達と産業化によって環境が破壊されている時に彼の考え方が気に入られている。それで**日本語をもっと勉強して彼のすべてのことを研究したい**と思う。

自己紹介（4/13）で「日本文学・文化に興味があります」と述べたBは、テーマとして「志賀直哉」を選ぶ。しかし、上記太字部分に表れているように、この段階では、志賀直哉の作品は「面白く」、「研究したい」という興味にとどまっている。自分自身と志賀直哉とをいかに結びつけていくかが、その後の授業における軸となる。

[II] 他者とのインターアクションによる表現の明確化

α. 「動機・仮説」をめぐるクラス内議論より

最初の議論（4/20）では、繰り返し「なぜ志賀直哉なのか」と尋ねられるが、Bの答えは明確ではない。志賀直哉を対象として選んだことについても揺れているようであり、一見して筋の通らない答弁が続く：

W：どうして志賀直哉について。

B：志賀直哉の作品で、自然の描写…描写？

X：…いろいろな本がありますよね、自然について。…自然について書く作家は他にもいっぱいいるじゃないですか？

B：私の考えでは、老荘思想は、東洋思想の中で一つの思想だと思っているけど、東洋思想は、とても広い概念だけど…私は小さい概念を勉強しようと思いました。

W：そうするとBさんは老荘思想と私ですよ。…老荘思想、志賀直哉はなんなのか、なんで、それについてBさんは書かなければならないのかということを書かないといけないですよ。

B：私は老荘思想をよく知らないけど…

また、最初のレポートに対して、「なぜさまよっている時に志賀直哉なのか」「たとえば志賀直哉の何を読んですごくいいと思ったのか」と質問される。これを受けて書かれた第二レポート（5/11）では、『暗夜行路』の一部を引用した後に次のような

記述が加えられた：

このような志賀直哉の文学を読みながら、私も彼のように苦しみをうれしさにかえることができた。

私が日本語を勉強する時たくさん苦しむことがあった。今ではそのときのことがなんともないと思ったが、その時には私の一人で世の中の苦しみを全部持っているように感じだった。それで人生を悲観的まで考えた時だった。

しかし、彼の文学を読むあと、すべてのくるしみも自然の法則だと考えて受け入れればかえって落ち着いた。

そのために私にとって志賀直哉は心の目だ。私に自然法則をみるほかの目をくれた人であるからだ。いままで苦しむように感じたことが彼により、新しく見え始めたから。。。

「志賀直哉がきっかけで苦しみをうれしさにかえることができた」（上記太字部分）ことが書かれているが、Bはまだそのことを具体的に自分と関係づけて提示していない。切れ切れであるがキーとなることばが出てくるのは、さらに「なぜ志賀直哉か」という問いが繰り返される授業（5/11）の中でのことであった：

Y：…志賀直哉は自分と結びつくところが少し見えてきましたけど、…でもその動機は、この中にあると思います？

B：…私は動機が、…いろいろなものを興味が失って、あのう待っているけど、その学問について失望したとか、私が愛する犬が死ぬとか、今はなんともないけど、そのときに、このいろいろなものが、私くやしい…

Y：でもなぜ、志賀直哉？

B：そして私が日本語を勉強する後、文学…「暗夜行路」の文学を読んで、この志賀直哉が、くやしみを消す、消すのときなどが自然と接すると、自然と、自然が自然法則が、日が、日が沈む後月がのぼる、水が流すように…。

断片的にキーワード（上記太字部分）が出てきているが、それが表現としてまとめられていない。これに対して、授業の参加者たちは、より具体的なことばを引き出そうとする。Bの体験と志賀直哉とをつなげて考えさせようとして、次のような働きかけがなされる（下記太字部分が具体性を促す問い）：

Y：その例文（作品の引用）を入れた理由，で自分は**どういう影響**をしたっていうかその中の，もう少し詳しく。

Z：なんかその**エピソード**はありますか？くやしく思っただけでもあとからこう，心が和んできたような…。

H：**なぜ志賀直哉**かっていうのがもうちょっと…，もうちょっと書くといいかもしれないね。それはたぶん犬が死んで，でとても苦しんで，でその中で，志賀直哉に出会った，ということじゃないかなと思うんだけど…

さて，これを受けたレポート（5/17）では，「田舎への憧れ」を描いた最初のレポートの書き出しが，次のように改められた：

他の人にもつらくて苦しいときがあるだろう。ほかの人は**苦しみをどのように解消するか**。私にも同じ質問をしてみる。

そして，15歳のとき生まれて初めて子犬を飼い始めた喜びを記述した後に，その子犬の死を迎えることになった悲しみの体験をリアルに綴っていく：

…（前略）…20歳になったときのある日。友達といっしょにあそんでいたのに，急に，私も知らず，涙が流れてしまった。おかしいな。。。気持ち悪い。。。…（中略）…
数日間，何もしなくて泣くことだけ。今頃，考えると，たいへんなことはないですけど，その当時，どうしてそんなにかなしいかな。たぶんその犬に対する惜しむ心ではないかと思う。もっと気にしてもう一度病院に連れて行かれるなのに，もっとおいしいものをやるのに。。。そのあと，犬の死に対する，いや私の無関心に対する**苦しみが心の片隅にしこり**になってのこっていた。

Bは，「しかし，今は以前のような**苦しみがなくなってしまった**」と続け，ここで，志賀直哉との出会いを語り出す。彼の作品を引用し，以下につなげるのである：

…しかし，彼を知ったあと，私も彼のように，自然法則について考えてみるようになった。そうだ。**犬の死も自然法則なのだ**。

生きるものがあれば死ぬものもある。たとえ**死ぬのが悲しいけど死ぬのが楽かもしれない**。わたしの知らず間，心の片隅にあった**苦しみが洗ったように解消された**。このように

私の考え方の変わるきっかけが志賀直哉なのだ。

それから私にとって志賀直哉は楽だ。今までの苦しみを解消して落ち着いている気分になるようにしてくれた。それで今は心が楽になっているのだ。

ここでは、自分の苦しみが「子犬をなくしたこと」であることが明確にされ、Bはそのことと志賀直哉の作品にある自然法則との関係づけを語ることに成功している（上記引用太字部分）。

ここまでのインターアクションは、特に、志賀直哉とBとの関係が次第にまとめられていく過程である。それにしたがって、Bの日本語にも論理性が表れ、読者にもその流れが感じられるようになる。

当初、「なぜ志賀直哉なのか」について、Bには漠然とした概念しかなかった。それが徐々に形を成していく過程が、授業とレポートの記録から読み取ることができる。Bは、他者から「なぜ」を連発され、自分の体験と思いを順序だてて考えていった。今まで気づかなかった自分の心の動きを対象化して整理し、それを再現していったのである。これを促したのは、つまり、Bが授業中に口にした切れ切れの単語をBに問い返して再考を迫ったのは、他者であった。

このように、自分でも理解していなかった思いをBは捉え直すことに成功し、それを次第に「自分のことば」として表現していくようになる。上記の引用部分は、Bにしか書けない「動機・仮説」の部分である（「私にとって志賀直哉とは〇〇である」という「仮説」は、この後、「楽だ」→「生きの先生だ」→「生き方の先生だ」と変わっていくが）。オリジナリティの提示には、今まで気づかなかった自己をことばによって表現するという、自己認識の明確化が必要であることがわかるだろう。

(3) 学習者C『日本の慣習と私』

[I] 最初のレポート（5/10）：「日本の慣習と私」

Cは他の学生より一回分遅れて授業に参加（4/20）している。この段階では、他の学生のレポートも読んでおらず、「仮説」や「動機」に対する理解もまだない。最初のレポート（4/26）では、「日本の女性と私」というタイトルで書き始めているが、韓国の女性の地位と儒教とを結びつけ、「日本の女性の本当の姿を知りたい」とするなど、いわゆる、集団類型的な把握が目立つものであった。これを「日本の慣習と私」に変えて再スタートをきることとなったのが、以下のレポートである：

私が日本に来る前に、一番心配したことは勉強も日本語もなく食べ物であった。`日本は寿司とさしみで有名な国で、島国だから魚をいつもたくさん食べだろ。`と思いがその理由であった。私は魚の種類を全然食べられないから、`日本で何を食べながら生きるか`が一番大きな心配であった。

… (中略) …

食べ物も分明に文化とか慣習だと思っている。ローマにいくとローマの法を従わなければならぬという話もありように、日本には日本の慣習を従った方がいいと思っている。しかし多様な国、多様な人々の特性を尊重することがいいと思っている。**文化的な違うことを理解しなければならない**と思っているけど、とても難しいことと思う。

上記太字で示した記述から窺われるように、Cは、「刺身を食べられない」ことに関して自分はどうか考えるのか、という立場を表明することができず、この問題を一般論でしか語っていない。しかし、自分の問題として対象を捉え「自分のことば」で語るためには、自分の立場を明確にすることが不可欠である。授業では、この点に関して明らかにするようCに迫っていくことになる。

[II] 他者とのインターアクションによる表現の明確化

α. 「動機・仮説」をめぐるクラス内議論より

Cは上記のレポートを提出した直後の授業（5/11）でも、なぜこのテーマで書くのか、このレポートで何が言いたいのか、問題について自分はどうか考えるかを提示することができない。以下のやりとりの太字部分に、その迷いが表れている：

W：… (前略) …魚を食べるといふ慣習について、Cさんはそれをどう思っているんでしょうね。

C：**強要することは悪いことだと思いますけど …。どのくらいまで、しゅうかんとか慣習を認定するか、 …。**

その一方で、次のようなやりとりも見られる：

X：…たとえば、韓国に行った日本人がキムチを食べられないって言ったら、Cさんはどんなふうと思う？

C：**理解しようと思う。努力しなければならないと思う。**

結局、Cの考えていることは、進行役 Wの次のような言葉にまとめられる：

W：（何度かのやりとりの後で）…最後に書いてあるのは、**どうしようかな、やっぱり食べなきゃいけないのかなー、でも食べられないわって迷ってますよね**。だから、私は食べなくていいんだって思うんだったら、みんなにそうなんだと思わせるような文章をかいてください。…（後略）…。

この後書かれた第三レポート（5/17）を見てみよう。上記 W のアドバイス（「だから…」以下の部分）は容れられて、次の段落が付け加えられていることがわかる：

日本人は靴を脱ぐ時、靴の向きを変えて置く。他の国々ではそのようにしない。日本人は靴の向きを変えて置くことが後で靴を履きやすいからだそうが、韓国では靴をそのまま脱いで置くことが脱ぎやすいだそうだ。双方の意見は全部正しいと思う。だから、慣習とは正しいことかどうかという問題がなくて、理解の問題だと思う。

私はローマにいくとローマの法を従わなければならないという話はもう説得力がないと思う。現代は昔とはとても変わる世界だと思っているからだ。現代は世界化の時代で、多様な国々の多様な人々が多様な文化を持って共に生き抜いている。**私は今の時代は自国、自民族の文化、慣習だけを通そうとすることより、他の文化と慣習を理解しよう態度が必要な時代だ**と思っている。つまり、よく知らないこととか、理解できないことでも理解しよう開放的な考えが必要だと思う。

ここでは、太字部分に一応の立場表明がなされたと考えられる。

しかし、この部分は次の第四レポート（5/24）では下記のように変えられた：

つまり、私は魚を食べることとか、ひざ突いて座ることなどの**日本の慣習全部を従いたくない**。'ローマに行く」とローマの法を従わなければならない'と話もう説得力がないと思う。すでに国境を越える多い往来があるし、お互いの多様な文化を接する機会が多くなるし、多様な国々の多様な人々が多様な文化を持って共に生き抜いている。

「慣習全部を従いたくない」と、立場表明がよりクリアになったかということ、そうではない。この部分には以下の文章が続き、逆戻りともとれるような記述になっているのである：

このような私の考えまでも、自文化しか考えない態度かもしれない。実は、日本の慣習をどのくらいまで捉えるし、どのくらいまで従うかについては、まだ迷っている。しかし文明にいえることは、少数を配慮する心が必要だということである。

さて、＜「従いたくない」、でも「自文化しか考えない態度かもしれない（ので迷っている）」、でも「少数を配慮する心が必要だ」＞という、迷いを抱えて迎えた授業（5/25）では、自分の立場表明をできないCが一般論に逃げ込もうとする様子も見られる。「日本人にインタビューして」と、他人の意見に頼ろうとするのである：

H：この文章で何が一番言いたい。…私はさかながきらいだってことを言いたい。違う？ …じゃ、一番言いたいことが書いてあるのはどこですか。

C：一番最後のところの日本の慣習を …どのくらいまで従うかについて、日本人にインタビューして …

H：いやいや日本人の意見じゃなくて、Cさんの意見、Cさんの今の考え。

C：全部は従う必要はないと思いますが、少しはどのくらい従うことが必要かと思います。

自分の考えをつかみかねているCに対して、授業参加者たちは、立場の確立＝「仮説」の宣言に誘導しようとする。以下のやりとりにはこれが表れている：

Y：この文章の中で仮説に当たるところはどの辺になりそうだと考えてますか。

C：日本の慣習全部を従いたくないが私の仮説だと思います。

Y：それはCさんにとって何が何だということになるんですか。

Y：（再度）わたしにとって何々は何だという形にまとめるとすれば、…。

H：（再度）私にとって日本の習慣とは …むずかしいもの？ …お風呂屋さんは友達の家だっというように、同じように言えないかな。私にとって日本の習慣とは。

上記で示された「私にとって日本の慣習とは〇〇だ」の形に自分の「仮説」（立場表明）を当てはめるよう促されたCは、次のレポートで最終的にこれを取り入れる。再び最後の部分が書き換えられるのである：

日本の慣習は私にとって新しい社会に入るための練習だと思う。なぜなら、大学を卒

業してから就職する場合とか、他の国に留学する場合のように、新しい集団に入ればいつも新しいルールに直面することに違いないからである。私の価値観と違うこと、自国の慣習と違うことを直面する時、どのぐらいまで自分のことを主張し、どのぐらいまで集団のルールを捉えるかという問題について多い試行錯誤を経るかもしれない。しかし、その経験は私に必ず必要なことだと思っている。それで日本で日本の慣習と文化を経ながら、社会に適応するために必要な違う価値観について受容範囲を確立しようと思っている。

ここでは、「新しい社会に入るための練習」ということばが導き出される。ここに到って、Cは、自分にとって対象とはいったいどのような意味があるのかという、自分の中で整理されていない思いを表現し始める。しかし、自分にとって「必要なことだ」と言いながら、なぜ必要なのか、どのような基準で違う価値観を受容するのかなど、問題の中心と思われる問いは、この段階でなされない。

β. インタビューより

このようなCの表現が大きく変わるのは、アメリカで一年間、英語研修を経験したZへのインタビューを経てのことである。このインタビュー報告をするCのレポートには、Zが何度も言い争いながらもある韓国人女性とお互いを認め合っていた経緯が綴られた後、次のように続けられている：

Zさんは自分の価値観とか自分の考え方とは違うことに会った時、自分の考え方が変わって、他の人の考え方を変えた。Zさんの話を聞いて、新しい社会に入る時とか珍しいことに会った時、自分の価値観とか主張だけ考えなくて他の人とか社会の立場を許容して、共に変わるプロセスが必ず必要で重要だと思った。

ここでCは、Zの体験を通して自分自身の「新しい社会に入る体験」を捉え直し、「他の人とか社会の立場を許容して、共に変わるプロセス」の重要性に気づくことになる。Zという他人のことばを借りて考えた結果が、ありありと描かれているのである。

さらに、「他人の意見を受け入れる許容範囲があるか」と尋ねたCに対して、Zは「私には自分の基準がある」と答える。これに対してCは次のように呼応していった：

自分の基準を設定しなければならないという Z さんの意見は私の意見と同じだった。
もちろんその基準は自分自身の精神が許せる範囲内で設定することだと思う。Z さんの
そのような話しは、そのラインを設定することについて迷っていた私に大きいヒントを
与えた。

また、「自分がお酒をのまないことに関して他人にこれを説明して理解を求める」
という Z のことばから、C の思考はさらに広がっていく：

Z さんは「日本の慣習は私にとって新しい社会に入るための練習だ」という私の仮説
に賛成した。彼はアメリカの生活が自分にとって新しい価値観と文化に対処する方法を
練習したそうだった。彼は来年大学を卒業した後で新しい社会に入らなければいけない
と言った。彼はアメリカの経験を通じて自分の許容範囲が広がったと言った。

この部分は、C の結論部への示唆となる。Z の「許容範囲が広がったこと」を自分
の許容範囲が広がる可能性と重ね合わせて、C は結論部に以下の表現を入れるのであ
る：

…（前略）…いろいろな人々のいろいろな考えを聞いてから、私の考えと理解心もち
よっと広がったと思う。それで私がまた新しい社会に入って違う慣習を直面する時、
今日本でぶつかる日本の慣習と日本で会った様々な人々、このようないろいろな経験に
よって、私の心のライン、その他のことについての許容範囲がもっと広がっているこ
とを信じている。

このように見ていくと、C の思考が刺激されたのは、インタビューの相手から「自
分の基準」という視点を示されたことがきっかけであったと言えるのではないだろう
か。ある意味でこれが、C の言いたかったことだったのかもしれない。「自分の基
準」を持った相手 Z が、「自分のことば」で語るのを受けて、C はこの段階で（恐ら
く初めて）「日本の慣習」を自分の問題として捉え直すことができたようである。Z
のことばがキーとなって、C は自分の思考を発展させ始める。上記に引用したインタ
ビューの報告レポートでは、C の表現が溢れ出す様子が見て取れる。「仮説」づくり
にはあれほど自分の立場表明に苦労した C が、他者の意見に対する自分の考えを次々

に語り始めるのである。

自分の思考を他者によって刺激され、始めは自分の内から無理やり絞り出していた表現が、いつの間にか、積極的な「自分のことば」に変わっていく。「これが言いたかったのだ」という自己発見は、自己認識の明確化に他ならないだろう。Cのことばが、自己の立場の明確化とともに次第に明確に、またオリジナルなものへと変わっていくことも、以上の記録から読み取れるのではないだろうか。

5. 結論

授業記録や受講者のレポートの変遷をたどっていくと、必ず、切れ切れの単語が次第にまとまって形を成していくプロセスが見て取れる。これはまた、曖昧であったテーマが他者とのインターアクションを通して、より具体化・明確（的確）化されていくプロセスと見ることもできる。これは、他者とのインターアクションによって学習者の内言が刺激され、思考（内言）と表現（外言）とがつながっていくプロセスである。それは、あたかも自分のイメージを形にする「粘土細工」をつくっていくプロセスと同じようにも思われる。学習者は、問題を自分のこととして捉え直すことが繰り返し要求され、自分の漠然とした思いを自分なりに形にしていくそのプロセスにおいて、今まで認識していなかった自己を新たに認識することになる。それが、「私」の内側から出た「自分のことば」として表現されるのである。つまり、自分自身の考えていることを明確につかむことこそがオリジナリティにつながる、と言えるのではないのだろうか。逆に言えば、この「オリジナリティの獲得には自己認識の明確化のプロセスが不可欠」なのである。

このプロセスにおいて重要なのは、もちろん、他者の存在であろう。「私」が言語を学ぶのも他者からならば、自己の形成も他者の存在による。つまり、他者が「私」をつくらうと言えるのである。オリジナリティとして提出されることばの習得過程にも他者が不可欠であることは、このレポートで分析の対象とした「総合」の授業記録より明らかである。

他者とのインターアクションによって、今まで認識していた自己の上にまた新たな認識が加わる。これは、潜在的な自己がまだ存在しているという可能性も意味している。ひとは永遠に新たな自己を認識し続ける。自己をつかんだと思っても、実は全部をつかみきれてはいないし、つかんだ瞬間にそれはもう別のものになっていることも

あるだろう。新たな環境に対応できる能力というのも、この新たに自己を獲得できる能力を言うのかもしれない。

自分の言いたいことをできるだけ明確に相手に伝えることはもちろんのこと、相手の意見を聞き、理解し、そのことによって自分の思考の幅を広げることのできる能力は、コミュニケーション活動の基本である。一方的な自己主張に終わるのではなく、しなやかな人間関係を取り結ぶことのできる能力の獲得をめざすのが、この「総合」の授業である。